

## 第 1 部

日本行動計量学会の  
35周年を祝って

## 日本行動計量学会35周年を祝う

山本俊一  
東京大学名誉教授

日本の大部分の学会は、同じ専門分野の研究者が集まって、互いに研修し批判するいわゆる「縦割り学会」である。その方法論を共有するからといって、多くの異質の専門分野からの研究者を集めて、その方法論を論ずるという「横割り学会」は少ない。

日本行動計量学会発足当時の会員の多くは、「このような形式の学会は、日本の社会には適さないため成立しないのではないか？ また、たとえ成立したとしても、それが長続きするかどうか？」と心配した。しかし、現実には、この学会はその後発展し、ここに35周年を迎えた。めでたい限りである。また、これは如何に行動計量学が各分野で方法論として役立っているか、の証拠であろう。

[名誉会員、元編集委員長]

## 日本の計量心理学者は世界におけるビジブル マイノリティではない

西里 静彦

トロント大学名誉教授・関西学院大学

1965年9月アメリカ留学から帰国した晩秋のこと恩師故戸田正直教授の推薦で箱根小湧園で北川敏男、国沢清典、森口繁一先生指揮下に開催された日科技連の会合に出席した。テーマは因子分析。それから43年、いまでも吉沢正、奥野忠一、竹内啓先生などの講演、それに続いた素晴らしい質疑応答が強く印象に残っている。討論の雰囲気素晴らしかった。若輩、浅学の自分でも当たり前にはばかりず討論に参加するグループダイナミクスがあった。それは留学前には思いもよらない学際的な会合で日本の学界の新しい夜明けを告げているように思われた。それまで心理学を専攻しながら統計学部、バイオメトリクスの公衆衛生学部のセミナーに自由に出席できたノースカロライナ大学の学際的環境が日本にもあればと考えて帰国したが、その様な環境が既に生まれていたのである。

1966年には就職難の日本を発ちカナダへ、そして1967年マギル大学からトロント大学に移ったが、私の所属した学部には心理学、統計学、物理学、数学、教育心理学の専門家がいた。その多彩な背景は当時の北米の大学の良いところのひとつで、様々な領域のコンサルタントの集まりのようであった。しかし皆は専らそれぞれの専門領域の学会にだけ出席するという実情があった。現在の北米では、多くの学会で関連領域の人々の参加が増えているが、統計学会であれば統計学の専門家が全体を牛耳っているというのが実情である。

それに比べ、行動計量学会は様々な領域の第一線で活躍している研究者が集まって構成したバランスの取れた学際的学会である。35年前に発足した学会は世界でも非常にユニークな存在であった。このように考えると、行動計量学会の構想を練り発足させた人々のビジョン、学会を支え学会の発展に貢献してきた多くの人々の尽力は非常に高く評価されるべきであろう。これは行動計量学会会員全ての誇りである。

行動計量学会の学際性は多くの人々に学界での活躍の場を与え、様々な考えの存在を体験させ、どのような専門領域でどのような知識を持っていても各自の妥当な問題意識が存在し、それが正当な研究につながっていることを教えてくれた。

私の専門領域は計量心理学であるが、計量心理学には例えば統計の専門家には見えないかもしれない問題があると思って自分なりの研究に従事してきた。

1960年代の日本の計量心理学の研究者の数はごく僅かで、国際的貢献も限られていた。現在はどうかであろう。日本の多くの計量心理学者が世界に向かって羽ばたいた。もはや日本の計量心理学者は世界におけるビジブル マイノリティではない。この背後には行動計量学会の大きな貢献があったからで、大いに感謝している。行動計量学会の更なる健全な発展を祈りたい。

[2001年度 (第16回) 功績賞受賞]

I understand that the Behaviormetric Society of Japan is thirty five years old. This period almost perfectly coincides with my career as a quantitative psychologist. I came to North America as a graduate student at the psychometric Lab at the University of North Carolina (UNC) in 1972, and it's been 36 years since then. It means that the Society was officially born one year after I moved to North America, although preliminary movement toward the creation of a new academic society was already apparent with Professor Yanai spearheading the movement.

In 1977, I got my Ph.D at UNC and moved to Canada. My record indicate that I attended ten annual meetings of the Society ( 8 th at Keio, 10th at Kokuritsu Kokugo Kenkyujo, 11th in Kyoto, 13th at Hokudai, 14th at Todai, 16th at Chibadai, 17th in Okayama, 19th at Nagoya, 21st at Handai, and 22nd at Tsukuba). The last one I attended was in 1994, and it's been more than ten years since then. This is partly because a new school year used to start after the Labor Day (the first Monday in September) in North America, but recently it often starts earlier (sometimes at the end of August) to finish the fall semester before Christmas. This has made it difficult for me to attend the meeting, which is usually held in mid-September. In 1986, I received the first Scientific Contribution Award (now renamed Hayashi-sho) from the Society. I recall that I advocated the development of “ cognitive statistics ” and statistical expert systems at that time, but so far this has not materialized to a satisfactory degree.

[1986年度 (第 1 回) 功績賞授賞]

## The influence of the Behaviormetric Society stretches far beyond the boundaries of Japan

Michael W. Browne  
The Ohio State University

The Behaviormetric Society of Japan is an influential and productive society of about 1000 members. I find it laudable that it facilitates cooperation between producers of mathematical and statistical methodology and the social scientists who apply it in their research. Approximately half its members are mathematically skilled developers of sophisticated methodology and the other half are applied scientists from various disciplines who make use of the most modern statistical methodology in the execution of their research projects.

The society is predominantly Japanese but maintains strong international ties. It produces one journal in Japanese, the Japanese Journal of Behaviormetrics, and an international journal, Behaviormetrika, with articles published predominantly in English but with occasional contributions in other languages. The contributors to Behaviormetrika include many internationally renowned scientists, and the regular invited contributions on important topics by acknowledged experts are of special interest. It is worth noting that reprints of Behaviormetrika articles are available without charge on the Internet at <http://www.jstage.jst.go.jp/browse/bhmk/>. A number of members of the Behaviormetric Society are also members of the Psychometric Society and some have served on the Board of Trustees of the Psychometric Society or as Associate Editors of Psychometrika. There is a reciprocal arrangement between Behaviormetrika and Psychometrika in which each journal publishes the table of contents of the other.

In summary, the Behaviormetric Society of Japan is a flourishing society devoted to the quantitative analysis of behavior and its influence stretches far beyond the boundaries of Japan.

[Associate editor of Behaviormetrika]

## 日本行動計量学会35周年を祝う

猪 口 孝

中央大学法学部・東京大学名誉教授

行動計量学会の35周年記念に際して祝賀の気持ちをお伝えいたします。実は行動計量学会に至るまでは、何回も学習会、研究会のようなものに参加していました。当時は大学院時代の終わり頃でした。柳井晴夫教授が当時から指導者でした。私は政治学・国際関係論の分野で、計量的な方法を用いて奮闘していました。具体的には、国際関係の動きを政治指導者の手紙のやりとりから分析していました。大量の外国語の新聞を読むことがひとつの難関、もうひとつの難関は言葉をどう分析するかでした。後者は多変量解析に落ちつききました。多変量解析といってもはじめからやるのですから、結構大変でした。

まず、当時、フォートランでしかも自分でプログラムをかけたということで、私も数量化理論Ⅲ類とⅣ類のフォートラン・プログラムを東京大学大型計算機センターのライブラリーに寄付しました。それから計算してもらおう仕組みになっていたのですが、いちいちパンチカードを打ちにいたり、計算結果を取りにいたりで大変というか、呑気な時代だったなあと思います。それだけ懐かしい気もします。行動計量学会へと向かう過程のただなかで米国留学に行きました。帰ってきたら学会は出来ていました。改めて当時の柳井教授はじめ、繁樹教授などのイニシアティブの偉大さを感じました。

留学から帰ってしばらくして日本行動計量学会の仲間と本郷の近くで食事をしたことがありました。そのときなんでそこだけよく覚えているのかわかりませんが、スパゲッティを頼もうとしたら、メニューの名前がわかりません。挽き肉トマト・ソースのがナポレタンとはてんで知りませんでした。誰だったかが、米国にいてもナポレタンも知らないみたいと驚いていました。それらしいものは米国でも賞味はしていましたが、名前にはこだわらず、食べるだけでまったく無知でした。そんな穏やかな時代でした。その後、行動計量学会もほんのたまにしか参加できず、当時から忸怩たるものがありました。でも何かで偶然遭遇することがありました。

柳井教授に駒場東大前駅ですれ違ったこともあります。繁樹教授には大学院生の支援を求めたこともありました。もっと最近では2007年夏のサイコメトリカの東京大会に参加しました。行動計量学会報で知った35周年記念の行事にも参加させてもらおうかなあと思っています。この数年、アジア29カ国で「普通の人々の日常生活」について世論調査を行っております。行動計量学に再接近していることをひしひしと感じます。多変量解析でもその他の計量的方法についても進歩が激しく、とまどうこともあります。牧歌的時代に育ったものには当然でしょう。驚異的な躍進をとげた行動計量学会の35周年にあらためて祝意を表明いたします。

[元編集委員、元運営委員]